

## オバマ米国大統領 広島訪問スピーチの全文(2016.5.27)

翻訳：桂木 健次 氏

71 年前の明るい雲ひとつない朝、死神が空から降り立ち、世界は変えられた。ライトのフラッシュおよび火の壁が都市を破壊し、人類は自分自身を破壊するための術（すべ）を所有しているのを証明した。

なぜ広島に この場所に私達は来るのか？私達は、そんなに遠くはない過去に解き放たれた酷い力を考えるために来る。私達は、10 万人を超える日本人男性、女性と子供、数千人の朝鮮人、および一ダースのアメリカ人捕虜を含む死を悼むために来る。

それらの人達は私達に話し掛け、私達は誰それであって、その私達になるかもしれない姿というものが見えているのかと問いかける。

広島をほかから際立たせているのは戦争の事実そのことではない。

暴力的紛争は最初の人類とともに出現していたのだと、人の手により作り出された物が語りかけている。私達の初期の祖先は、火打ち石から刃物を木からやりを作ることを学び、これらの道具を、狩猟だけでなく同じ人間に対しても使っていた。どの大陸においても、文明の歴史は戦争で満ちていて、穀物不足や黄金への欲望、また民族・国家主義者の熱情や宗教上の熱情が、戦争を余儀ないものにしてきた。国家主義の熱情または宗教の熱心により強要される。帝国が台頭しては衰退した。民族は鎮圧されて、解放された。そして、それぞれの転機において、罪のない人々が苦しみ、無数の犠牲者を生み、その彼らの名前は、時とともに忘れ去られてきた。広島と長崎でその残忍な終わりをした先の世界大戦最も豊かかつ強盛な大国間で行なわれた戦争であった。それまでの文明は、世界の偉大な都市と壮大な芸術をもたらし、彼らの思想家達は、正義と調和そして真実についての概念を前進させていた。しかし、戦争というのは、最も単純な形態の部族間における争いの原因となり、支配や征服に対する同じような基本本能に起因していた。つまり、新たな制約のない新たな能力により、その古いパターンは（絶えず）増幅するということである。（先の大戦の）数年間には、およそ 6 千万人が死んだ。我々と何の変わりもない男女、子供たちが、撃たれ、殴られ、連行され、爆弾を落とされ、投獄され、飢えさせられ、毒ガスをまかれるなどして殺された。

世界中の多くの場所で、この戦争が記録されている。勇気や勇敢な行動を物語る記念碑や、言うに耐えないほどの悪業を代弁する墓や無人の収容所などがある。しかし、この空に上っていったきのこ雲のイメージは、我々に、人間の核心にある矛盾をこれ以上ないほどに思い起こさせ迫る。私達を人類たらしめる特性、すなわち私達の思想、想像、言語、道具製作や、自然と我々を区別する能力、そして自然を私達の意志に屈服させる能力 といっ

た一切のものこそが、比類ない破壊をもたらす能力をも私達に与えた。

物質的進歩や社会革新が、この真実に対する我々の判断力を奪ってしまうことがいかに多いことか。私達は、どれほど容易に、あるより高い原因の名において暴力を正当化するのを学ぶのか。偉大な宗教は、愛と平和、そして正義への道を約束している。しかし、いかなる宗教も、自分の信仰は殺人を許可していると主張する信者の存在を、免れたことはない。驚くべき偉業を見越しつつ、犠牲と協力の中で人々を結束させる物語から国家は生じるけれども、それらの同じ物語は、違う人々を圧迫し、人間性を失わせるためにもしばしば用いられた。

科学は、海を横切って私達が通信し、雲の上を飛ぶことを可能にする、病気を治療し、宇宙を理解することが可能になる。しかし、その同じ発見はいつその効率的殺害マシンに変えさせることが可能になる。現代の時代の戦争はこの真実を教える。広島が教えているのはまさにこの真実なのである。

人間の社会で同等の進歩を伴わない技術進歩は、私達に（破滅を）運命づけることができる。原子の核分裂をもたらした科学の革命は、道徳的な革命をも必要としているから。それが、私達がこの場所に来る理由である。

私達は、ここ、この街の中心に立ち、私達自身に、爆弾が投下されたときの瞬間を想像することを強られる。私達は、目の当たりにした光景に混乱した子供たちの恐怖を感じることを強られる。私達は無言の泣き声に耳を傾けて聞く。私達は、あの恐ろしい戦争やその前の戦争、そしてその後起こった戦争の連鎖の中で殺された、全ての罪なき人々を追悼する。

だからこそ私達は、この場所に来るのである。

単なる言葉では、そのような苦しみに声を与えることができないけれども、私達は、直接見るために、共有されている歴史、その苦しみを繰り返さないために何をすべきなのかを問う責任を持っている。いつの日か、生き証人としての被爆者の声は聞こえなくなるであろう。しかし、1945年8月6日の朝の記憶は、決して風化させてはならない。その記憶を糧に、私達は現状への満足と戦うことができる。その記憶は私達に道義的な想像力を掻き立ててくれる。それは、私達が変わることを可能にする。

そして、その決定的な日以来、私達は、自らの希望を与える選択をしてきた。米国と日本は、国としての同盟を作り上げたけれども、戦争を通じて希求してこれたお互いの人々のためにもっとまさった親交を忘れなかった。

ヨーロッパの諸国では、通商と民主主義を束縛してきた戦場を取り替えて同盟を築いた。圧迫された民族と国家は、解放を勝ち取った。国際社会は、戦争を避けるために働き、核の武器の存在を限定、後退し、最終的に取り除くことを展望した機構と条約を設立した。

それでも 国家の間のすべての侵略、すべての恐怖と腐敗、および世界中で私達が見る残酷さと抑圧、その私達の仕事を示すすべての幕は未だ降ろされていない。私達は、悪業を働くための人からその能力を取り除くことはできていない。従って、私達がつくり上げている国家と同盟は、自身を防御するための手段をまだしばらく所有していなければならないかも知れない。

核素材を所持している私自身のアメリカのようなそれらの国家間では、恐怖のロジックを免れて、それらなしで世界を希求する勇氣を持たなければならない。私の生涯にこのゴールは実現できないかもしれないけれども、持続的な努力により大災難は避けることはできる。

私達は、これら核素材による破壊を引き起こすケースを予期して、その新たな国家への広がり止めて、狂信者からこの必殺の核素材を守ることはできる。にも関わらず、今日、有り体のライフルと樽爆弾でもってさえ相応規模の暴力に役立つことができるかをわかる私達には、それは十分な歯止めではない。

いま、私達は戦争自身についての私達の思考様式を変えなければならない。

- ・外交を通じて衝突を防止し、それらが始まった後にはその衝突を終えるために努力する。
- ・私達の（経済）成長の相互依存を、暴力的な競争ではなく平和な協力のためのものとする。
- ・国家を破壊能力によってではなく、私達が築くものによって定義する。
- ・そして、たぶんに私達の種をユニークならしめるためにであるが、とりわけ私達互いの結び合いを人類のメンバー同士のものとしてイメージし直さなければならない。

私達は、遺伝情報により、過去の誤りを繰り返すことを義務づけられない。私達は学ぶことはできる。私達は選ぶことはできる。私達は子供達に、共有しあえる人間性、そして好ましくないこと、安易に受け入れるものではないこととして戦争を説明するべつの物語を話すことはできる。

私達は（原爆資料館で）被爆者にこれらの物語を見る。彼女は、知り合った原子爆弾を落とした飛行機の操縦パイロットを許した。彼女が本当に憎悪したのは戦争そのことであつた。そのパイロットはここで殺されたアメリカ人のファミリーを捜していた。投下の損失が彼自身と等しいと信じていたのだった。

私の国家アメリカの物語は簡単な言葉から始まった。「すべての人は等しく創造されて、私達の創造者から生命、自由、および幸福の追求を含む一定の譲渡できない権利を与えられる。」

私達自身の市民の間でさえ私達自身の交友の内ですえ理想が一度も容易であったことがないことに気がつく。しかし、その物語に忠実なままでいることは、努力に値する。それは、大陸と海洋を横切って拡張する理想のために努力することが理想であるということである。

すべての人の削減できない価値、すべての生命が貴重で根本的で必要な観念、私達は単一人ファミリーの一部である。それは、私達すべてが話さなければならない物語である。

それは、私達が広島に来る理由である。

私達が愛しているひとのこと、私達の子供の朝の最初の微笑み、キッチンテーブルの上の配偶者からの優しい感触、親の抱擁。そうした人々について考える。

私達はそれらのことについて考えて、71年前にここでそれらの同じ貴重な瞬間が起こったと知っているかもしれない。死んだ人々 それらは 私達に似ている。

普通の人々はこれを理解していると、私は考える。彼らはより多くの戦争を望まない。彼らは、科学の素晴らしさが生活を改善し、それを取り除くのではないようにすることを望んだのだ。

そして国によってその選択が行われ、リーダーによりこの簡単な知恵が反映される時、広島がレッスンされる。

世界はここで永久に変わったけれども、今日、この都市の子供達は平和の日を通り抜ける。なんと素晴らしいことだろう。それは保たれて、すべての子供に拡張するに値する。それは私達を選ぶことができる未来、広島と長崎は核戦争の夜明けではなく、私達自身の道義のめざめの始まりとして知られる未来なのである。

〔共同〕

(完)

## *Text of President Obama's Speech in Hiroshima, Japan*

Seventy-one years ago, on a bright cloudless morning, death fell from the sky and the world was changed. A flash of light and a wall of fire destroyed a city and demonstrated that mankind possessed the means to destroy itself.

Why do we come to this place, to Hiroshima? We come to ponder a terrible force unleashed in the not so distant past. We come to mourn the dead, including over 100,000 Japanese men, women and children, thousands of Koreans and a dozen Americans held prisoner.

Their souls speak to us. They ask us to look inward, to take stock of who we are and what we might become.

It is not the fact of war that sets Hiroshima apart. Artifacts tell us that violent conflict appeared with the very first man. Our early ancestors, having learned to make blades from flint and spears from wood, used these tools not just for hunting but against their own kind.

On every continent the history of civilization is filled with war, whether driven by scarcity of grain or hunger for gold, compelled by nationalist fervor or religious zeal. Empires have risen and fallen, peoples have been subjugated and liberated, and at each juncture innocents have suffered — a countless toll, their names forgotten by time.

The World War that reached its brutal end in Hiroshima and Nagasaki was fought among the wealthiest and most powerful of nations. Their civilizations had given the world great cities and magnificent art. Their thinkers had advanced ideas of justice and harmony and truth, and yet the war grew out of the same base instinct for domination or conquest that had caused conflicts among the simplest tribes, an old pattern amplified by new capabilities and without new constraints.

In the span of a few years some 60 million people would die: men, women, children — no different than us, shot, beaten, marched, bombed, jailed, starved, gassed to death.

There are many sites around the world that chronicle this war — memorials that tell stories of courage and heroism, graves and empty camps that echo of unspeakable depravity.

Yet in the image of a mushroom cloud that rose into these skies, we are most starkly reminded of humanity's core contradiction — how the very spark that marks us as a species, our thoughts, our imagination, our language, our tool making, our ability to set ourselves apart from nature and bend it to our will — those very things also give us the capacity for unmatched destruction.

How often does material advancement or social innovation blind us to this truth? How easily do we learn to justify violence in the name of some higher cause?

Every great religion promises a pathway to love and peace and righteousness. And yet no religion has been spared from believers who have claimed their faith has a license to kill.

Nations arise telling a story that binds people together in sacrifice and cooperation, allowing for remarkable feats, but those same stories have so often been used to oppress and dehumanize those who are different. Science allows us to communicate across the seas, fly above the clouds, to cure disease and understand the cosmos. But those same discoveries can be turned into ever more efficient killing machines.

The wars of the modern age teach us this truth. Hiroshima teaches this truth. Technological progress without an equivalent progress in human institutions can doom us. The scientific revolution that led to the splitting of an atom requires a moral revolution as well.

That is why we come to this place. We stand here in the middle of this city and force ourselves to imagine the moment the bomb fell. We force ourselves to feel the dread of children confused by what they see.

We listen to a silent cry. We remember all the innocents killed across the arc of that terrible war, and the wars that came before, and the wars that would follow.

Mere words cannot give voice to such suffering. But we have a shared responsibility to look directly into the eye of history and ask what we must do differently to curb such suffering again.

Some day the voices of the Hibakusha will no longer be with us to bear witness. But the memory of the morning of August 6, 1945 must never fade. That memory allows us to fight complacency. It fuels our moral imagination, it allows us to change.

And since that fateful day we have made choices that give us hope. The United States and Japan forged not only an alliance, but a friendship that has won far more for our people than we can ever claim through war.

The nations of Europe built a union that replaced battlefields with bonds of commerce and democracy. Oppressed peoples and nations won liberation. An international community established institutions and treaties that worked to avoid war and aspired to restrict and roll back and ultimately eliminate the existence of nuclear weapons.

Still, every act of aggression between nations, every act of terror and corruption and cruelty and oppression that we see around the world shows our work is never done. We may not be able to eliminate man's capacity to do evil, so nations and the alliances that we formed must possess the means to defend ourselves.

Among those nations like my own that hold nuclear stockpiles, we must have the courage to escape the logic of fear and pursue a world without them. We may not realize this goal in my lifetime, but persistent effort can roll back the possibility of catastrophe.

We can chart a course that leads to the destruction of these stockpiles, we can stop the spread to new nations, and secure deadly materials from fanatics. And yet that is not enough, for we see around the world today how even the crudest rifles and barrel bombs can serve up violence on a terrible scale.

We must change our mindset about war itself -- to prevent conflicts through diplomacy and strive to end conflicts after they've begun; to see our growing interdependence as a cause for peaceful cooperation and not violent competition; to define our nations not by our capacity to destroy but by what we build. And perhaps above all we must reimagine our connection to one another as members of one human race -- for this too is what makes our species unique.

We're not bound by genetic code to repeat the mistakes of the past. We can learn. We can choose. We can tell our children a different story, one that describes a common humanity, one that makes war less likely and cruelty less easily accepted.

We see these stories in the Hibakusha: the woman who forgave a pilot who flew the plane that dropped the atomic bomb because she recognized what she really hated was war itself; the man who sought out families of Americans killed here because he believed their loss was equal to his own.

My own nation's story began with simple words: "All men are created equal, and endowed by our Creator with certain unalienable rights, including life, liberty and the pursuit of happiness."

Realizing that ideal has never been easy, even within our own borders, even among our own citizens. But staying true to that story is worth the effort. It is an ideal to be strived for, an ideal that extends across continents and across oceans.

The irreducible worth of every person, the insistence that every life is precious, the radical and necessary notion that we are part of a single human family: that is the story that we all must tell.

That is why we come to Hiroshima, so that we might think of people we love, the first smile from our children in the morning, the gentle touch from a spouse over the kitchen table, the comforting embrace of a parent.

We can think of those things and know that those same precious moments took place here 71 years ago. Those who died, they are like us.

Ordinary people understand this, I think. They do not want more war. They would rather that the wonders of science be focused on improving life and not eliminating it.

When the choices made by nations, when the choices made by leaders reflect this simple wisdom, then the lesson of Hiroshima is done.

The world was forever changed here, but today the children of this city will go through their day in peace. What a precious thing that is. It is worth protecting and then extending to every child.

That is a future we can choose, a future in which Hiroshima and Nagasaki are known not as the dawn of atomic warfare, but as the start of our own moral awakening.